はまゆう

第 59 号
令和３年 12 月発行
発行所
社会福祉法人高和会
障害者支援施設
はまゆう園
〒882-0104
宮崎県延岡市北方町角田丑 1369-35
TEL（0982）47-3481
FAX（0982）47-2822
E-mail : k-hamayu@ma.wainet.ne.jp

秋祭り

今年も第40回収穫祭は、コロナウイルス感染拡大防止の為中止となりましたが、それに代わる秋祭りを、自治会中心で園内で行いました。文化展・カラオケ大会を楽しみ、家族会からの豪華なお弁当を食べ、退職職員「岩田」さんからの差し入れもあり、皆さん笑顔で楽しい時間を過ごされました。

目　次

・秋祭り
・ビアガーデン
・さわやか会
・はまゆう園多機能型事業所就労継続支援B型
・勤続40年を振り返って
・ユアーズコメヤさん来店
・はまゆう園干支商品
・編集後記

ビアガーデン

7月16日、毎年恒例のビアガーデンが開催されました。美味しいお弁当を食べながらビンゴゲームを楽しみました。景品や厨房特製手作り梅酒も準備され、利用者さんの笑顔が溢れていました。

さわやか会

9月17日、さわやか会が行なわれました。６５歳以上の利用者さんの長寿を祝う会です。カラオケやゲーム・スライドショーを楽しみました。昼食のお弁当を食べ楽しい時間を過ごしました。いつまでも、お元気でお過ごし下さい。

はまゆう園多機能型事業所
就労継続支援B型

事業所内外において、就労の機会や生産活動の機会を提供し、
皆で協力して工賃向上を目指しています。

延岡市教育委員会
閉校施設委託業務

洗濯作業

■1日の主な日課のながれ

8：30 ～　9：00 …… 朝礼
9：00 ～ 12：00 …… 作業訓練
12：00 ～ 13：00 …… 昼食・休憩
13：00 ～ 15：40 …… 作業訓練
15：40 ～ 16：00 …… 帰宅準備　終礼

安心・安全を心がけ新鮮な野菜を販売しております。

椎茸作業

農作業

仲間と協力して、やり遂げると楽しいよね。

「あれから40年…」

宮崎県障害児・者そうだんサポートセンターはまゆう
相談支援専門員　佐島　良一

はまゆう園は、昭和55年(1980年)8月1日に開園しました。同年の2月に採用試験があり、私も第1期の職員として採用されました。4月から開園前の全体研修が始まりました。行政の専門家を招いての座学、施設の見学、泊まり込みの実習、入園予定者の家庭訪問などでした。研修は4ケ月ありましたが、日当は500円で、月数千円にしかなりませんでした。いつ招集がかかるかわからないのでバイトもできず、全員ジリ貧でした。集まっては飲んで大騒ぎしていたあの酒代はどこから出ていたのでしょうか。

【昭和55年12月】 クリスマス会(職員による劇「裸の大様」)

開園時の利用者は30名(男子18名、女子12名)。職員は施設長、総務、厨房を含め全員で22名だったと思います。ほとんどの職員は福祉の未経験者でした。居住棟は現在の1棟のみで、敷地にはフェンスもなく、舗装もなく雨が降ればまわりは泥だらけでした。

さて、何から手をつければいいのかわからず、アドバイスをくれる先輩もおらず、毎日暗中模索の中、利用者には大人として当たり前の生活をしてもらおうと、働くことや衣食住を重視した日課や支援体制を組み上げました。朝7時から体力作りでラジオ体操とジョギング、昼はみんなで農作業をして、入浴は夕食の後でした。みんな一生懸命でしたが、若さと無知ゆえの失敗も数多くありました。

夜勤は、日勤から続く24時間以上の拘束勤務ではありましたが、最初からぶっつけ本番だったので、不安で眠ることができませんでした。案の定、夜間には想像できなかったことがたくさん起こり、泣き笑いしながら朝を迎えたことも珍しくありませんでした。

はまゆう園は、開園時の精神薄弱者更生施設から知的障害者更生施設に、さらに障害者支援施設になりました。支援員も、過去には指導員という職名でした。入所定員は段階的に増え、平成8年に100名になり、平成19年には減員して現行の90名になりました。また、法人全体では現在11事業を開設、職員数も220名を超える大所帯となりました。

40年以上の歴史を振り返る中で、不幸な事故もあり、法人の存続にかかわるような大きな事件もありました。私もぺえぺえの新米から経験を重ねることができ、10年ほど前からは直接支援の現場から身を引き、定年を経て現在は相談支援専門員として側面から利用者支援に携わっています。今では、一緒に現場で汗を流した支援員はごくわずかになってしまいました。定年後は、はまゆう園に、高和会に、そして先輩や後輩たちに恩返しするつもりで働こうとずっと思ってきましたが、この5～6年で私にいったい何ができたのか疑問が残ります。

「明るく、たくましく、明日をみつめて」のスローガンを掲げて始まったはまゆう園の利用者支援。高和会の多くの後輩たちにしっかり受け継いでいってもらいたいと切に願っています。頑張れ!

「40年を振り返って」

はまゆう園多機能型恒富事業所
所　長　大津留　睦子

【昭和56年７月】　浦城での家族そろっての１泊キャンプ

「働く中で、たくましく」　はまゆう園設立時からの合言葉です。

“自分たちの日常を施設にも=大人としての当たり前の生活を”という発想から、「働く」「毎日入浴」「温かい食事を提供する」「興味を引き出す」等々、当時のスタッフで知恵を絞り日課を組み立てました。

仕事は、近くの山の開墾から始まりました。畑を作るために、持ちなれないつるはしや、なた鎌をふるったものです。秋には、実りの秋をみんなでお祝いしました。「収穫祭」の始まりです。第1回目のお客様は、唯一近くにあった「北方町ゴミ焼却場」の職員の方々5～6名だったと思います。夏は、保護者も含めてキャンプを楽しみ、冬になれば雪を見に早日の峰に車を走らせました。

「どんなことをすれば、みんなが喜ぶかな?」「こんな経験したことあるかな?」若いときは、そんなことばかり考えていたような気がします。

やがて、月日が過ぎ私は入所部から通所部(現、はまゆう園多機能)への配属となり、在宅生活を送っている利用者様の担当となりました。ここで、地域生活を送る利用者様やご家族の思いを知ることになります。「どんなに障がいが重くてもこの人が私の宝だから若いうちは一緒に生活したい」「でも、年を取ったときのことを考えたら不安なのよ」そんな声をよく耳にしました。それからは、自宅生活で力になれること、利用者様の将来を見据えた寄り添い方について、何をすればよいか考えるようになりました。

その後、50歳になった私は制度の変化に伴い、延岡は恒富に新しくできた多機能型恒富事業所への移動となります。これまでとは全く違った就労系の事業所です。

当初はスタッフ4人、利用者20名でのスタートでした。自分にとって「働く」ということはどういうことなのか。この仕事に就くにあたって、これまでとは異なる概念を作り上げる必要がありました。さて、どんな仕事で利用者様の工賃を捻出したものか。当初は不安で、夜なかなか寝付けなかったことが思い出されます。当たって砕けろ精神で、個人の家へ飛び込み、庭の除草作業の提案をしたり、障がい者雇用について、目についた事業主に実習の依頼をしたものです。

おかげさまで、14年後の現在、法人の後押しと、ここに集う利用者様や職員のやる気と地域の皆様方の理解とご協力に恵まれ、清掃作業を基幹産業とし、利用者様の平均工賃がようやく約20,000円に達することができました。また、一般就労していただいた利用者様も30名を越しております。“就労”を通して思うことは、障がいがあってもなくても、社会の役に立ちたい、1円でも高いお金を得て自分の生活を豊かにしたい、という願いは、人間皆同じだなということでした。

40年を振り返り、私はこのはまゆう園での自身の就労生活から、計り知れない恩恵を受けました。「働く中で、たくましく」利用者様との日常を通して自分自身が、人として成長できる良い職場に恵まれたと思っております。

退職までのあと数年、老体を感じつつ、心は、まだ何が起こるかわくわく、ドキドキ楽しみに日々を過ごしております。

「40年を振り」

はまゆう園多機能型事業所
所　長　西山　智穂子

【昭和55年 秋】　山の畑の開墾風景

昭和55年4月はまゆう園に勤めることになりました。しかし、園は8月開園を目指し、まだ建設中。それまでの4ヶ月間は研修ということでした。時々招集され、研修と親睦会でしたがどちらかというと親睦会の色が濃かったようです。でも、「初めまして」の人ばかりの集団にとっては、このような機会があったことで、すぐに馴染め団結していったように思います。

利用者30名でスタートした当初、園の近くの山を借りみんなで開墾を始めました。毎日鍬やつるはしを担いで山へ。木の根っこを掘り上げ、草を刈り、数か月かけて畑になった時の感激は今でも忘れられない思い出であり、はまゆう園の原点だと思っています。その後、手芸班、ふすま班、工芸班、ブロック班と作業の数が増えてくると、どこからとなく「収穫祭しようか」の声が上がり、作業班ごとに屋台を作り、カレーや焼きそば、おでんを作りみんなで楽しみました。体育祭も職員が一番燃えた行事の一つでした。中でも職員の応援合戦は保護者の方の一番の楽しみになるほど人気で、仮装行列や組体操、北方青年団の力を借りての和太鼓の演奏、寸劇を入れて失敗したこともありますが、みんなに楽しんでもらおうと頑張りました。というと聞こえはいいですが、ほんとは職員が好きだっただけのようにも思っています。利用者、職員の社会見学旅行も、初めはキャンプから始まり他県への旅行に変わっていきました。旅先で迷子になったり、ホテルから一人散歩に行かれた利用者さんを慌てて探すなどなど、毎回失敗して帰って来る旅行でした。どの行事も試行錯誤しながら利用者、職員が一体となり作り上げてきたものだからこそ、誰もが生き生きとした笑顔が絶えなかったことは、懐かしい思い出です。

【昭和56年】　第２回 運動会

あれから40年。たくさんの地域の方々に助けられながらこの地に根付いてきたはまゆう園も、今では7つの関連施設で構成され、利用者200名を超える大きな施設となり、何もかもが新しく変わっていく中で戸惑いもありますが、利用者さんの元気に助けられながら頑張っています。時々、同期の職員と「あのころは…」と昔話に花を咲かせることもしばしばです。

「社会福祉法人高和会と共に42年」

障害者支援施設はまゆう園
総務主任　林田　千穂

昭和54年に社会福祉法人高和会が設立し、私は当時延岡高校に通いながら事務所にて精神薄弱者更生施設はまゆう園の昭和55年8月1日開所に向けて準備のお手伝いからの始まりでした。開所した定員30名のはまゆう園では、利用者様もそのご家族も職員もそしてその家族も、運動会は北方小学校のグラウンドで一緒に走り、大きな玉転がしも手作りです。お弁当を食べ酒を飲み一緒にお風呂に入り、一緒に寝る。秋には河原でおにぎりを作り鮎を焼き何かと言っては酒を飲むのです。仲良くならないはずはありません。全てをさらけ出し助け合う大きな家族の様でした。あれから42年高和会は、はまゆう園・多機能型事業所・多機能型恒富事業所・生活介護恒富事業所・そうだんサポートセンター・障害者就業生活支援センター・グループホーム13ホーム・延岡市西部地域基幹相談支援センターと拡大し地域の皆様に助けられ愛されてきました。そんなはまゆう園で人生の殆んどを全力で邁進してこれた事は、本当に幸せなことだと感謝しか有りません。

令和2年12月31日に退職された日髙省三施設長が、先日理事会の為久しぶりにはまゆう園に来られました。お会いして改めて気付いたのですが、ここまで無事に頑張れたのは、仕事も子育ても趣味の書道や料理も時には壁にぶつかり前に進めそうにない時も、全てを受け止め只いるだけで安心して頑張れる環境を作って下さっていたのだと言う事です。「人にはいろいろな時期がある、焦らなくても大丈夫」と優しく見守ってくれる人がいたことで乗り越えられたことも沢山有りました。

そうして守られてきた私も、気が付けばあっと言う間に60歳です。只いるだけでホット安心してもらえるように少しはできているのでしょうか。これからの人生、私がして頂いてきたことを皆様にお返して行ければこれも又最高の幸せだと思いながら日々過ごしています。

コロナ禍において思うことを魂を込めて趣味の書道で表現しました。どんな時も大丈夫!!明日を見つめて頑張りましょう。

ユアーズコメヤさん来店

10月と12月の4日間ユアーズコメヤさんが、はまゆう園に来店しました。衣類や寝具・靴を各々選び、レジに並んで購入しました。どれにしようかと迷いながら購入している姿が見られました。久しぶりの買い物で楽しい時間を過ごしていました。

❖ はまゆう園 干支商品 ❖

創作や陶芸を生きがいに頑張る利用者さん14名と職員６名が一丸となって、来年の干支 寅(とら)の置き物づくりに励んでいます。

令和４年は36年に一度の「五黄の寅(ごおうのとら)」の年になります。「五黄」は九星の中でも最強の運気を持つとされています。寅(とら)は家に入ってきた邪気を外へ追い払ってくれると言われています。

問い合わせ先　はまゆう園
TEL:0982−47−3481
FAX:0982−47−2822

今年も大変お世話になりました。来年もよろしくお願い致します。

編集後記

月日の経つものは早いものですね。コロナ対策に追われる毎日でしたが、気が付けば今年も残すところあとわずかです。第40回の収穫祭は今年も開催することができませんでしたが、利用者様とコロナに負けず精一杯1年間楽しんでまいりました。はまゆう園も8月1日で42年目を迎えました。開園から在職している職員が6名、その中から今回は4名の職員の方に思い出を綴ってもらいました。

今年も大変お世話になりました。来年もよい年でありますように。

はまゆう通信編集担当：杉本ルリ子・濵田僚士・宮田智貴・今村珠美・甲斐智子・田中浩子・黒木恵子